ISSN 0918-9882

じっきょう アグリフォーラム No.55

農業教育資料

■ もくじ ■

力強く生きる農業の担い手を育てる
―新規参入しやすい環境づくりを― ……❶
社会・産業界が求める能力 ……❹
農業を仕事（職業）として選ぶ若者
―新規就農事情について― ……❼
「明日への環境賞」受賞
―有機農業の取り組みによる後継者育成が評価―……❾
農業高校におけるSPP事業への取り組み ……⓫
農にふれ、食をみなおす「食と農」の博物館 ……⓭
農業高校への期待 ……⓯

力強く生きる農業の担い手を育てる

――新規参入しやすい環境づくりを――

酪農学園大学酪農学部教授
長谷川　豊

はじめに

戦後60年を迎えようとしているが，相変わらず農政主導の農業が続いている。最近はそれに見切りをつけ自らの農業，農村を確立しようと動き始めた人たちが増えてきたが改革にはほど遠いのが実態である。このままでは日本農業は衰退の一途をたどりやがては壊滅してしまうと危惧しているのは早計だろうか。農畜産物の価格低迷や輸入の急増，牛のBSE，鳥インフルエンザなど解決しなければならないが，担い手不足はより深刻な問題である。日本農業の激動期を後継者教育に携わった者として自戒を込めながらこれからの担い手確保のあるべき姿について考えを述べたい。

農業・農業高校の歴史的背景

戦後，食糧不足解消のため政府は米の生産を奨励，全国的に造田し，国民の空腹は癒された。そして，昭和40年代，それまでの備蓄と豊作により稲作が大転換され「米さえ作っていれば安心」の甘い考えがうち砕かれ，生産調整がなされ農業者にとって大きな試練を迎えたのである。その時，ほとんどの人は稲作の時代が再来すると信じ転作に消極的であった。以来40年，２度と稲作の栄光は戻らなかった。そればかりでなく食管制度の撤廃と米の自由化にまで発展するような厳しい状況に追いやられ，農業者は将来の農業のあり方について先行き不透明な時代を迎えることになる。

農業高校もまた，押しつけ教育で子供達の持てる力を存分に発揮させることもなく魅力のない教育を展開してきた。そこで学んだ者が実際に農業経営に携わったとき十分な力を発揮できるかは疑問で，ひたすら親の考えに従い行政や農協の指導のまま生産することだけで，実際に彼らが営業者になったとき自分の子どもに自信を持って後継を勧めることができず１人，２人減りして農村は過疎化が進んでいった。そんな影響を受けて農業高校に入学する生徒の数も年々減少を続け一時は全国に478校185,000を数えた生徒数が平成16年では387校106,400人と半減の実態である。（表１）

しかし，一部の学校では，このままでは生徒数の減少に留まらず廃校に追いやられると奮起し「農業高校とは何か，どうすれば生徒が確保できるか，魅力とは何か」などについて論議を重ね問題解決に取り組み，危機を乗り切った例もある。その内容とは21世紀を目前に出された食料・農業農村基本法の

生徒数の推移（全国農業高等学校長協会）

年度	全日制	定時制	合　計	年度	全日制	定時制	合　計
S52	174,952	9,170	184,122	（全国校長会として正式に調査開始S52年）			
S55	165,688	5,632	171,320	H7	130,436	2,748	133,184
S60	151,249	3,575	154,824	H12	115,582	2,711	118,293
H2	150,984	2,900	153,884	H16	104,000	2,400	106,400

先取りである。全国の農業高校が先んじてこれからの日本農業のあるべき姿の指針を示したといっても過言でない。

平成11年新しい食料・農業農村基本法が制定された。今まで生産一辺倒で来た農業を大転換させるもので，農業者や消費者が待ち望んでいた理想の形でこれが実現すれば足腰の強い日本農業・農村が形成される。その為には農業や農村に定着する若者，「農業の担い手」が居なくては立派な理想も絵に描いた餅になってしまう。我々指導者がこの問題と真正面からぶつかり農業・農村に対する愛着と理念，実践力，バイタリティを持った担い手を一人でも多く育成することが急務である。

農業高校の教育内容を変革させる

まず，農業後継者育成の中心を成してきた農業高校を大きく変革させることである。農業高校もまた国の方針に従って生産一辺倒の教育を行ってきた反省から，今回の基本法改定をどのように受け止め教育の中に導入すればよいか検討する必要がある。

私の勤務した農業高校ではいち早く改革に取り組んだ。食料・農業農村基本法の柱を二つの方向に大別した。前者はフードシステム系列，即ち農業や畜産科で生産したものを食品科学科で付加価値をつける。それを生活科学科で販売する。後者は自然環境を守り育てる科としてフードシステム系列を支援する教育を展開する。しかし，これを横並びのクラス単位で行うのでは今までの分業と何ら変化がないことから，総合選択制として個に応じたカリキュラムとする。例えば，農業科学科に入学した生徒は今まではその科で編成された科目しか履修することしか出来なかったが，入学したその科で基礎基本を学び自分の興味関心，進路に合わせて設定した科目から選択する方法である。

その内容を魅力あるものにするために，産学共同研究の形で推進した。一例を示すと工業大学，農業者，農業高校とで行った雪冷熱試験，地元スーパーの食品残査物の飼料化試験，糞尿処理のためのバイオガス導入試験など，生徒がプロジェクト活動を通して地域の人たちと関わりを持ち自信を得て学習する姿は正に次代を背負って立つ農業の担い手そのものである。地域の教育力を学校に取り入れることは計り知れないほどの効果がある。学校を地域に開放し多くの住民との交流を深め両者で子供を育てることを改めて認識しなければならない。

表２は北海道における農業高校の卒業生数と就農，進学状況を示したものである。生徒数は年々減少するものの就農者及び進学後の就農予定者が増加している。原因は，北海道は他府県と違い，既に昭和40年代後半より離農が相次ぎ過疎が始まったことや普通科志向が重なり，常に魅力ある農業教育を展開しなければ生徒は集まらないと言う危機感があり学校，地域ぐるみで乗り切ってきたことが今に繋がっている。昭和50年代前半には付加価値農業に取り組み農畜産物の加工を手がけ町の特産物を作り出したり，他の産業との連携で直売所の設置やデパート，スーパーでの販売や体験，企業とのパートナーシップによる新しい作物の発見や開発，幼稚園や小学生への体験指導，講習会，農業高校フェアなど。その活動を新聞，テレビで報道。そんな影響で「農業は面白い」と目的を持った生徒が多く入学してくるようになった。

行政、農業団体と連携をはかり「認定就農者育成」

最近ようやく新規就農者を確実に確保しようと「認定就農者」に農業高校生を対象にする自治体が増えてきた。認定就農者は都道府県が認定し国が資金支援する。1995年から始まり主に都道府県にある農業大学校に入学する生徒を対象に行われた。卒業後，後継者，新規就農者として農業を行うことを条件にした制度である。

2005年４月７日の日本農業新聞の記事によると2003年度は全国で1287人が誕生している。2004年度は，宮城県は51人中農業高校生23人。鹿児島県

は56人中20人になるという。認定を受ける一番の利点は金銭面と実践的な営農計画を作成できるのが一番で，この際，農業改良普及センターが品目毎の収支や利益見込みなどを示し協力を仰ぐことができる。営農計画を一緒になって作るということは，高校生も自分の将来像を具体的に描くことができるので目的意識を立てやすいという記事であった。

ここで必要なことは，指導に高校の教員も一緒に加わることである。普及センターに丸投げするようでは意味がない。生徒は両方からより高度な情報が得られるように工夫し，更に，普及センターと学校の連携がより強固なものに発展させる事である。

他にも新規就農の道は多く存在する。私の経験からすると今の農業高校生や大学生達は本当に農業が好きで農業をやりたい人が沢山いる。しかし，その希望を叶えられないで道を閉ざしている現実がかなりある。私は現在，教え子と花卉，野菜の経営を行っている。目的は優秀な農業の担い手を１人でも多く育て農業の発展に寄与したいからである。現在研修生として３名，将来の独立を目標に部門を任されて頑張っている。また，今年から，会社の社長がスポンサーとなって第二農場を設けた。そこでは本学を卒業した学生２名が，将来の農業経営者を目指して有機農業に取り組んでいる。いずれも，素直で意欲があり研究熱心で，地域にとけ込み可愛がられている。その若者が中心になって農産物の直売を札幌市に設けたいと計画中である。そんな姿を見て地域の人たちも変わる。

北海道の農業に関する学科卒業者の進路状況総括表（表２）

１　農業に関する学科卒業後の就農率（全日制＋定時制）H14.5.1

卒業	卒業者	直ちに就農		進学後就農		就農可能数	
年月	数	就農者	率	進学者	率	合計	率
S61.3	2,063	374	18.1	149	7.2	523	25.4
S62.3	1,970	312	15.8	136	6.9	448	22.7
S63.3	1,981	244	12.3	147	7.4	391	19.7
H1.3	2,019	257	12.7	142	7.0	399	19.8
H2.3	2,155	193	9.0	151	7.0	344	16.0
H3.3	2,259	156	6.9	156	6.9	312	13.8
H4.3	2,213	141	6.4	159	7.2	300	13.6
H5.3	2,231	109	4.9	141	6.3	250	11.2
H6.3	2,222	122	5.5	186	8.4	308	13.9
H7.3	2,215	125	5.6	202	9.1	327	14.8
H8.3	2,193	132	6.0	179	8.2	311	14.2
H9.3	2,083	100	4.8	173	8.3	273	13.1
H10.3	2,111	100	4.7	174	8.2	274	13.0
H11.3	1,961	85	4.3	171	8.7	256	13.1
H12.3	1,882	87	4.6	165	8.8	252	13.4
H13.3	1,841	76	4.1	148	8.0	224	12.2
H14.3	1,855	80	4.3	160	8.6	240	12.9
H15.3	1,849	80	4.3	146	7.9	226	12.2
H16.3	1,793	108	6.0	160	8.9	268	14.9

農業高校と大学の連携が必要

社会情勢の変化により農業もまた特別高度な知識・技術が要求される，もはや農業高校だけでは対応できなくなっている。現実に最近では農業高校から大学，短大を目指すものが学校によっては５割を越えている。しかし実態は，大学に入学しても普通高校出と同じ教育を受けるために，普通教科では自信をなくし農業教科では物足りなさを感じ持てる力を十分に発揮出来ないでいる者が多い。高校と大学がより連携を深め彼らのために条件整備することが必要と考える。また，試験的ではあるが私の勤務した農業高校では近くの普通科高校の生徒に農業教育履修の門を開いた。２名の生徒が放課後農業の実験・実習に挑戦，総合実習の単位を取得し，農業の大学，専門学校に進学し将来は農業の関連に就きたいと希望に燃えていた。

おわりに

新規参入者が容易に研修出来る場の提供と受け入れ体制の確立が重要である。北海道を始め農業を主産業としている県では，行政が音頭をとって新規に農業を希望するものを対象に説明会を行い条件が合った人を研修生として受け入れ，研修センターを設置したり指導農業士のもとで研修を行う制度が定着し農業を行う人が増えている。しかし，官主導では限界があり，個々の農家では，研修生と寝食を共にする煩わしさがあり長続きしない。私が試みている方法に農業塾がある。教え子達と始めたその方法は宿泊する場所を提供し，共同生活しながら農業経営の技術と人間性を養う民間の研修センターである。３，４年じっくり農業の楽しさ，厳しさ，地域の人たちと共に生きる事の大切さを身につけ新規の農業者となって独立する。そんな施設が広まっていくと真の農業担い手が育っていくのでないだろうか。